

私の意見「読売新聞 10 月 19 日一面記事の違和感」

2015.10.23 碓本 岩男

1、まえがき

筆者は巨人ファンではないが読売新聞を取っている。3.11 以降の朝日新聞のあまりにも偏った報道に辟易して、3 年前に代えた。読売新聞は原発（エネルギー）問題、政治問題に比較的中立的な記事が多いと友人から聞いていたからであり、事実、朝日新聞のような偏った論調ではない記事が多い。

しかし、10 月 19 日朝刊の、編集委員・増満浩志氏による一面トップの署名記事には驚いた。JAEA（原子力機構）茅野政道氏等の、福島事故の放射性物質大気放出の研究結果を取り上げた記事であるが、あまりに唐突であり、記事の内容も一面トップで報道するに値するとは筆者には思えず、違和感があったからである。

そこで、この記事についての筆者の違和感を述べてみる。

2、唐突な記事

反原発の主張を続けている朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、あるいは報道ステーションで取り上げるのであれば、このような福島原発事故関連の記事を掲載してもいつものことであり、違和感を持たない。原発問題に対して比較的中立的な記事を書いてきた読売新聞の署名記事、一面トップであり、しかも、スクープでもないのに、何故この日に記事にしたのかが分からず、唐突であったからである。

唐突と言ったのは、この記事の基になった研究成果は、静岡大学で行われた 2015 年秋の原子力学会で、9 月 10 日に既に発表された内容^(注1)であるからである。何故、今になって一面のトップ記事にしたのかの理由がまったく分からないからである。

(注1) 「L30 福島第一原子力発電所事故時に様々な大気放出を引き起こした原子炉の推定」、(JAEA) 茅野政道、永井晴康他、日本原子力学会 2015 年秋の大会

「エアボーンモニタリング手法の現状と課題 (3) 無人ヘリコプターにより測定された福島第一原子力発電所周辺における沈着放射能の Cs-134/Cs-137 比の分布」

(JAEA) 西澤幸康、吉田真美他、日本原子力学会 2015 年秋の大会

3、記事として取り上げた研究

原子力学会では、福島事故を対象とした研究は他にも多くあり、放射性物質の放出挙動に関する同様な研究の発表^(注2)もあったが、茅野氏等の研究だけを取り上げていることも不思議である。

筆者は学会には参加していたが、残念ながら、茅野氏の発表は聞いていない。要旨だけ

の内容になり、筆者は機械技術屋なのでこの分野は専門外であるが、原子炉を推定したという以下に示した茅野氏等の研究結果が一面トップ記事になる内容とは思えないのである。

<3月15日に形成されたと考えられる福島県東部の高汚染地域は、2号機と3号機からの放出によるものであり、主たる汚染原因となった原子炉は時間帯により異なる。3月20～21日の降雨により、岩手県と宮城県の県境、及び霞ヶ浦周辺で長距離汚染が形成され、前者は3号機、後者は2号機からの放出が原因と考えられる>

(注2)「福島事故関連：放射性物質の分布と環境動態1～9」で59件の発表があり、これ以外にも「原子炉過酷事故における放射性核分裂生成物放出挙動の評価;10 環境に放出されたFPの各種比 $^{134}\text{Cs}/^{137}\text{Cs}$ の評価」(エネ総研)内田俊介、他「原子炉過酷事故における放射性核分裂生成物放出挙動の評価;11 SAMPSONコードによる原子炉周辺FP分布評価」(エネ総研)伊藤あゆみ、他などがある。

4、読売新聞記事内容

<見出し>

「3号機も高濃度汚染源」「ベント後放出か」「原子力機構が推定」

<記事のリード>

「原発の北西方面を放射性物質で高濃度に汚染したのは、格納容器が損傷した2号機からの大量放出に加え、3号機で格納容器からの排気(ベント)の操作をした後の放出だった可能性があるとの推定結果を原子力機構の研究グループがまとめた。東電の『ベントに伴う放出量は全体の1%未満』との見解は再検討を迫らせそうだ」

<記事本文(要約)>

「大気中の放射性物質の動きをコンピューターで計算し、陸地の汚染につながった大量放出の時間帯を絞り込んだ。その結果、原発の北西20kmまでの汚染地域は、15日夕～16日未明の放出が主な原因と推定された」

「2種類の放射性セシウム(Cs)134と137の比率は、核燃料の使用時間などによって変わり、原子炉ごとに少しずつ違う。研究グループはその比率を東日本の700地点以上で測定、無人ヘリによる調査も行った結果、15日夕～16日の放出による汚染地域は、2号機と3号機の物質が混じったとみられるCs比率だったことが分かった」

「東電の解析では、15日午前に格納容器が損傷、放射性物質を含む蒸気が大量に漏れ出した2号機が最大の汚染源とされている。しかし、15日夕には、2号機の圧力低下が続く一方、3号機でもベントの後、翌日にかけて、格納容器の圧力が低下しており、今回の推定で3号機から放射性物質を含む蒸気が漏れだしていた可能性が出てきた」

茅野政道氏はベントが原因と断定はしないが、検証すべきだ、と指摘する」

「ベントが大量放出の原因と断定されたわけではないが、その可能性が浮上した以上、東

電は予断を持たず何が起きたのかを調べ直すべきだろう」

5、疑問と違和感

専門家が集う原子力学会では、この記事の内容の基になった研究が意味のあるものであっても、一般の人（読者）へ一面トップで知らせる内容であるかは、はなはだ疑問である。

疑問とは、一般の人、被災された東北の人が興味を持つとすれば、放射線被曝やその影響に関する研究結果であり、放射線被曝量の問題に関しては、2号機からであろうが、3号機からであろうが関係がなく、放出された放射性物質のトータル量の問題だからである。大気への放出量についても既に茅野氏が研究結果を公開^(注3)しているが、これは一面トップの記事になっていない。

また、記事の見出しになった「ベント後放出か」について、茅野氏の学会要旨には放出原因（格納容器からのベント等）についてはまったく触れられていない。

記事に書かれた3号機格納容器の圧力低下に関しては測定値も残っており、石川迪夫氏の著書^(注4)にも東電の事故調査報告書に基づいて作成された圧力変化値が図として記載されている^(注5)。

この図の圧力変化を見れば、読売新聞の記事の内容に疑問を持つ。

3月13日の12時頃から、記事で問題にしている15日の15時頃（夕方）までの間に、5回のベントをしている。この5回のベントの内、4回は14日の15時頃までに行われている。更に、この4回のベントによる格納容器の圧力低下と、15日の15時頃からの格納容器の圧力低下は明らかに傾向が異なり、4回のベントによる格納容器の圧力低下は短時間に急激に圧力が下がっているのに、15日の15時頃からの格納容器の圧力低下は長時間にだらだら下がっているのである。記事にはこの傾向の違いについては触れていないが、一面で「ベント後放出か」の見出しとするのであれば、この違いについても茅野氏あるいは他の専門家に取材して見解を求め、ベント後放出の妥当性を載せるべきである。

15日の15時頃以降に3号機からの放出量が多くあったことがCs134と137の比率の違いから分かったことが例え事実^(注6)としても、今回の茅野氏等の研究では4回のベントでの放出量が有意には測定されておらず、5回目だけのベントで大量放出したとする推定には、この記事の内容だけでは疑義を抱いてしまう。科学的内容を読売新聞社の顔である一面トップ記事にするのであれば、何故、5回目だけのベントで大量放出するのかの理由と、その科学的裏付けを取材し、記事にしなければならない。

格納容器の圧力変化履歴の4回目までのベントと5回目のベントの違いを見れば、3号機からの放出があったとしても、ベント以外に放出原因があったと考える方が自然である。

記事では、茅野氏が「ベントが原因とは断定はしないが、検証すべきだ」と言っているとしているが、これが事実とすれば、研究者としての発言としては、「今回のCs134と

137 の比率の違いの測定結果から、15 日の 15 時頃からの放射性物質を含む蒸気が 3 号機からも漏れ出した可能性は高いが、格納容器圧力変化を見れば、ベントが原因とは考えにくい。それでも検証はすべきだ」と、正確に言うべきである。

ただし、茅野氏が検証すべきだ、と言ったのは、茅野氏が推定したこの研究結果を、茅野氏自らが今後検証していく、という意味のはずであり（研究者なので）、読売新聞としては東電の再調査を指摘する前に、茅野氏の今回の推定レベルを、より正確なレベルに引き上げるための検証に注目すべきである。

（注 3）「大気放出量推定」茅野政道、公開ワークショップ環境放出と拡散の再構築、2014.3.6

「WSPEEDI によるソースターム推定と汚染拡大プロセスの解明」茅野政道、放射線計測フォーラム福島、2015.7.14

（注 4）「考証 福島原子力事故 炉心溶融・水素爆発はどう起こったか」石川迪男、日本電気協会新聞部、2014.3.28

（注 5）同 128 頁、図 1.2.16 3 号機の格納容器圧力の変化

（注 6）筆者は 2 号機と 3 号機の燃料の燃焼度の違いによる Cs134 と 137 の比率の差、今回の測定精度、データ数から比率の差が有意と言えるのかを把握していないので、事実かを判断できない。

5、まとめ

これまで述べたように、専門家ではない筆者にも 3 号機からの 5 回目のベントが原因とする 10 月 19 日朝刊一面トップ記事には疑問、違和感を抱く。記事の内容も、茅野氏の発言も、不必要にベントを強調していることにも違和感がある。

また、今回の茅野氏等の研究はあくまでも推定結果である。しかも、放出した原子炉の推定という一般の人の興味が薄い内容であり、9 月 10 日に発表済みの内容である。スクープでもないこの研究を唐突に一面トップ記事とした読売新聞に大きな違和感を抱いたのは筆者だけとは思えないのである。

このような違和感を抱く記事の内容であり、朝日新聞から読売新聞に代えた筆者としては、これまで比較的中立的な記事を書いてきた読売新聞であっただけに、「読売新聞、おまえもか！」と言いたくなるほど、科学の報道とは異なる何らかの不純な意図が感じられる記事と感じてしまった。筆者には読売新聞、編集委員の増満浩志氏の意図を見抜ける能力も、知見もないので、「産経新聞」へ代えることを考えることにする。

以上